

School to Work Transition 期における 青年のキャリア発達の一考察

番田清美

(東京学芸大学学生キャリア支援センター)

Super によると人間は暦年齢にする関連したライフステージがあり、各ライフステージには緩やかな移行があるとしています。しかし、日本の場合は、学生から社会へのライフステージの移行期には「就職新卒一括採用」という社会的システムがあり、日本の学生は急激な自己概念の変化を求められます。探索段階と確立段階のトランジション期に、大学生たちは社会人となるための心的変容をどのように遂げているのかを調査することにより、彼らのキャリア発達を促進させる要因は何かを探究することを研究の目的としました。

大学を卒業した社会人2年までの方、就活を終えた4年生、計12名にインタビューを実施しました。「あなたはどのようにキャリア選択していきまされたか」という質問をなげかけ、背景・動機とともに、転機を中心に自由に語ってもらいました。インタビューをトランスクリプト化し、KJ法により意味のまとまりごとに見出しを見つけ、調査対象者にその解釈が恣意的でないか確認をもらいました。次に複線径路・等至性モデルTEMを使って、就職を活動開始から終了までを切り取り、抽出した見出しを時間軸に並べ、誰もが通る「必須通過点(OPP)」、個別性のある「分岐点(BFP)」を見出す作業を行い、それぞれの点における見出しの概念化を行いました。本研究では、多様な経験がいったん収束する地点「等至点(EFP)」を、本人が納得する形での就活の終了として、「就業へ進む」としました。さらに、その行動が促される要因としての「社会的促進(SG)」、そうせざるを得ない抑制要因である「社会的方向づけ(SD)」も合わせてみていきました。

TEMで描き出された概念についてご説明します。必須通過点(OPP)としては、就職を意識した後に「自己探索活動」を行い、就業を決める前に「信念

の強化・人生観の再確認」が見出されました。就職の前に仕事の意味付け作業が行われているようです。

自己探索活動を始めると「内省して自分と向き合う」作業に多くの時間を費やされます。対極として、自分と向き合う時間を取らない、あるいは避ける行動もみられます。ここを分岐点（BFP）としました。「内省して自分と向き合う」作業では、「個となって、孤独と向き合う」という語りができます。この分岐点（BFP）をへると、自分が社会で行う人生のテーマを発見、社会で生かせる自分の特性・得意分野の発見、自分の価値観の優先順位にふさわしい働き方を発見、社会の中で他者との関係構築の仕方を理解するといった、自分とは何かにかかわる気づきが現れてきます。一方、自己内対話を行っていない、孤独に向き合っていない学生は、自己理解が促進されないためか、就職が漠然としたイメージに留まっています。

孤独に向き合って内省する学生は、次の分岐点（BFP）として、将来の方向性や信念が定まり、働く意味が具体化する過程を迎えます。どうして働くかの、理由づけをしています。社会に貢献するため、収入を得て経済的に自立するため、あるいは自分の成長のための生涯学習をして仕事をする、またライフワークバランスのある生活をするためなど。この軸ができてくると自立的な就職活動が加速化していきます。さらに、実践コミュニティへの参画やモデルの存在が社会的促進（SG）となり、経済的貧困や人付き合いの限定が社会的方向付け（SD）として見出されました。

ここで、改めて、キャリア発達に、内省（個となって自己対話する、孤独と向き合う）するという語りは、どのような意味を持つのか考えてみたいと思います。自分に向き合う作業の一環として「孤独に向き合う」という語りが出現しますが、その「孤独」の質とは何なのかを探ることにしました。1987年の落合の『孤独感の類型判別尺度』を用いました。この尺度では、縦軸に「現実にかかわっている人と、理解・共感しあえると感じているか否か」、横軸に「人間（自己）の個性性に気づいているか否か」の4類型が行われています。

インタビューした12名のうち1名に調査できませんでしたが、11名を分析しますと、4類型中のA型かD型かに分かれてきます。A型は、人間同士は理解可能であり、個性性には気づいていない状態。D型は、人間同士は理解できると思い、かつ個性性に気づいている状態です。就職を勝ち取った学生ですので、全員が人間は理解・共感しあえるという認知はもっていましたが、自

分の個性に気づいているかどうかは分かれています。A型はかなり就職に苦勞した学生たちでした。A型は実践コミュニティに所属しておらず、実践コミュニティに積極的に参加しているのがD型であることがわかりました。他者と違う自分の個性を認識しているD型学生の方が、他者と協働する実践コミュニティで活動を行い、かつ自立的な就職活動ができていった学生であったのです。実践コミュニティとは、あるテーマに関する関心、問題、熱意を共有して、そのキャリアや技能を持続的な相互交流を通じていく集団です。

D型であり、かつ実践コミュニティへの活発な参加がみられた、調査対象者2と8のTEMを、個々に描き、就職活動が促進される要因を分析することにしました。「内省し自分と向き合う」ことをスタート地点とし、等至点(EFP)を「自立的な就職活動が加速する」時点としました。

調査対象者2は男性です。中高の時代にひどいいじめにあい孤独体験をしています。環境になじめなかったというバックグラウンドをもっている方です。就職活動を経て、内省して自分と向き合うことをすることによって、社会の中で他者と人間関係構築の仕方を理解していきます。実践コミュニティの中では、人の行動や思考を分析的に観察して、人の感情に配慮しながら、自分の意見を建設的に通すためのスタンスを考えて行動しています。働くモデルとして、経営者である父親を持ち、考え方の影響を受けています。社会で生かせる自分の特性、個性を発見し、自分のテーマが経営に関することであることを認識していきます。自己把握した内容をすべて言語化する作業を繰り返し行うことで、堂々と自分を語るようになり、自立的な就職活動が加速化されていきます。

もう一人の調査対象者8は女性です。女性特有の歩みが見てとれました。就職について、時期がきたから行うということに疑問を感じます。誰も知り合いのいない海外にワーキングホリデーに出ていきます。与えられるのではなく、自分で選び取る経験をするために、様々な実践コミュニティに入っていました。それは自分の価値観はなにかを探すための行動でした。その後、働き者で家庭の中心だったお母様が急病になられ、植物人間状態になってしまいます。緊急事態のなか、ご両親に理想の夫婦像を見て、母をモデルと考えるようになります。自分が家族を大切にしながら、どうやってキャリアを積んでいけばいいのかを考えていきます。不測の事態を経験して、「変化に対応できる人間になりたい」「2、3年でスキルが身について、任される幅が広い力を身につけ

るための就職をする」と考えます。女性としてどうやって子育てをしながら家庭を持ちながら仕事をしていくかを真剣に考えるようになります。仕事は transferable なものという認識を持ち、自分の人生のテーマは、家族を最優先しながら仕事もしっかりしていくことであると考えます。背負うものを明確に意識します。女性としての働くアイデンティティを確立して将来の方向性が決まり、自立的な就職が加速化していきます。男性、女性と違う視点で職業アイデンティティが形成されていく過程がありました。

実践コミュニティに視点を戻します。エンゲストロームは、境界横断が水平学習を生むとし、その効果を述べています。普段とは異なる業務を担当しているチームが、協力して課題にあたることで新たな学びが発生すると述べています。しかし、青山は「境界横断を行わないようにコントロールする実践」の存在を研究し、境界横断がそれほど優しいことではないことを指摘しています。境界線を超え水平学習を生むという作業以前に、学生の段階では他者集団である実践コミュニティへ参加することによって、自分のスタンスや個性を確認する機会が必要であると考えられます。境界横断の難しさを知ることで、それを超えるために自分は何を学ばばいいか、どういう主張をすればいいか、どうしたら人間同士の関係を保ちつつ理解し合えるのかを学んでいます。組織化されて丸ごと自分を取り込まれることなく、個性を出しながらも、円滑な人間関係構築をする力を育成するために、実践コミュニティへの参画の有効性が考察することができます。

今回の研究では、いくつもの実践コミュニティに所属し、人とは共感し・理解すると考えているが、自分の個性も認識している学生が、就職活動を成功裏に乗り越えていることが示唆されました。さらにその学生には、将来展望の根拠を裏付けるモデルがあることが、キャリア発達の促進要因となりえることが示唆されました。

【参考文献】

青山政彦. (2010). 境界を生成する実践—情報を伝えないことの意味をめぐって. 駿河台大学論叢, 41, 207-217.

Engeström, Y., Engeström, R., & Kärrikäinen, M. (1995). Polycontextuality and boundary crossing in exper cognition: Learning and problem solving in complex

- work activities. *Learning and Instructions*, 5, 319-336.
- 落合良行. (1983). 孤独感の類型別尺度 (LSO) の作成. *教育心理学研究*, 31, 332-336.
- サトウタツヤ. (2009). TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠心書房.
- Suoer, D. E. (1980). A life-span, life space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 13, 282-298.
- Wenger, E., McDermott, R., & Snyder, W.M. (2002). *Cultivating Community of Practice*. Harvard Business School Press.